

第二十一回 新城薪能

とき 平成二十二年八月二十一日(土)
午後五時始
ところ 新城文化会館大ホール

能 組

仕舞 西王母 川村美幸
蝉丸 加藤晃
是界 村田昂平
竹生島 今泉尚美

狂言 盆

山

盗人 本田蓮汰

某 田中悠貴

後見 大原正巳

火 入 式

新城市議会議長 荒川修吉
新城市教育委員長 馬場順一

連吟 天

鼓

シテ 永田聡子

ワキ 今岡アイ子

地謡 富成美代子
太田温子
中西深雪

鈴木富代
小林寿枝
竹下京子
伊藤秀子

仕舞 小 敦 籠 通 野
督 盛 太 盛 盛 宮
榎本美月 谷野允千帆 鳥居久仁子 本田洋子 岩崎葉子

小舞 土 鐘 曉 車
加藤久和 天野雅夫 大原正巳

あいさつ

新城市長 穂積亮次

連調東北

佐藤 栗谷 明生 陽

中西 伊藤 小林 星野 今岡 永田 聡子

狂言 蚊相撲

大名 佐野 泰三

太郎冠者 酒井 規 蚊の精 山本 勝

後見 天野 雅夫

仕舞

湯谷 中西 伊藤 秀子

船弁慶 太田 温子 富士太鼓 小林 寿枝 野宮 竹下 京子

仕舞

飛鳥川 太田 康弘

狂言 犬山伏

山伏 清川 松佐

出家 水谷 至男 茶屋 山口 俊一 犬 天野 雅夫

後見 酒井 宏

シテ 杉浦 史佳

能 葛城

神樂 ワキ 桜本 泰朗 渡辺 敏康

大鼓 清水 利高 小鼓 森田 收 大鼓 中嶋 康夫 今泉 英三

間 加藤 賢一

後見 粟谷 明生 太田 康弘

地謡 長田 共永 栗谷 浩之 太田 研司 中村 邦生 竹内 省吾 粟谷 能夫 鈴木 崇史 佐藤 陽

附 祝 言

(終了予定午後九時頃)

主催 新 城市

新 城市 教育 委員会

主管 新 城市 文化 事業 運営 委員会

新 城市 薪 能 実 行 委 員 会

三菱UFJ信託地域文化財団助成事業

あらすじ

狂言 盆山

盆山をたくさん持っている人に、いくら頼んでも一つもくれないので、男はこっそり盗みにやってきました。垣根を破り侵入し、盆山を物色しているところを見つけられます。物陰に隠れたが、盗人が顔見知りだとわかった主人は、さんざん、なぶります。犬かな？、猿かな？

さてさて、どうなりますか・・・

狂言 蚊相撲

大名は新たに人を雇うため、太郎冠者に適当な者を探しに行かせます。太郎冠者が都に通ずる大きな街道で待っていると、都で相撲取りになり、思うがままに人間の血を吸おうと、考えている蚊の精が通りかかります。その正体を知らない太郎冠者は声を掛け、連れて帰ります。喜んだ大名は、その腕前をみるために、自ら相撲の相手となります。取り組みが始まると、早速、蚊の精は大名を刺したので、大名は目を回してしまいます。さてさて、どうなりますか・・・

狂言 犬山伏

僧が茶屋で休んでいると、来合わせた山伏が横暴にも、自分の肩箱を持ってと迫ります。見かねた亭主が「ここに癡猛な犬がおります。お互い、祈り、なついた方を勝ちといたしましょう。」と提案します。亭主は僧に「犬の名前は虎といます。名前を呼べばなつきます」と耳打ちします。

僧は「虎」という言葉の入ったお経を唱えると、確かに犬はなついてきます。しかし、山伏が祈ると犬は吠え、噛み付いてきます。

さてさて、どうなりますか・・・

能

葛かつら

城き

羽黒山の山伏が、大和国の葛城山へとやって来ます。しんしんと降る雪に悩んでいると、柴取りの女人に助けられ、彼女の庵に一夜を明かします。火を焚きもてなす女人に、山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとします。すると、女人は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思い、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役えんの行者ごんぎやうに命ぜられた岩橋を架けなかったため、罰を受け苦しんでいると、消え失せます。

やがて、麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋のことについて尋ねます。その話を聞いた山伏は、先程の女人の事などに思いをめぐらせ、女神のために祈祷します。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦しみから救われた喜びを述べ、大和舞(神楽舞)を舞い、夜明けが近づくと、岩戸の内へ姿を隠します。

新城と能楽

新城の能楽は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、徳川家康の娘亀姫と結ばれ、新しいお城を郷ヶ原に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年(一五七六)、その落成祝いに親世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのが始まりです。

その後、元文元年(一七三六)、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で祭礼能(市指定文化財)を奉納するようになりました。富永神社には文政九年(一八二六)に再建された能舞台(市指定文化財)があります。この境内で町衆によって二七〇年余り、祭礼能として続けられています。

薪たきぎ

能のう

この名称は、夜になって薪を炊いて、それを照明代わりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して、新年に薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎への信仰行事でした。

新城においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が新城市文化協会によって催され、大好評を得ました。新城薪能は富永神社で行われる祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加できる、まさに「能楽の里」を目指しており、その想いは今も生き続けています。現在、日本全国で二百か所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方の全てが素人というのはほとんど例を見ないといわれています。このような新城薪能を、永い伝統を持つ富永神社祭礼能とともに、維持発展させていくことが私たちの願いです。